

【今日の説教から】

「われは幼子われ主にすがらん 小かくあれど 信仰いだきて、絶えず主イエスの手に依りすがらん、静けき昼も 風吹く夜も」

「主がわたしの手を 取ってくださいます どうして怖がったり 逃げたりするでしょう 優しい主の手に 全てを任せて 旅ができるとは何たる恵みでしょう」

今朝、静かに私たちは私たちが寄りすがることのできるお方に心を馳せたいと思います。

「誰もたどり着く 大川(おおかわ)も平気です 主がついておれば わけなく越えましょう 優しい主の手に 全てを任せて 旅ができるとは 何たる恵みでしょう」

私たちをはぐくみ育ててくださった父祖は今、このお優しい神様の懐に抱かれています。子が父に何も求めないとしたら、父は悲しい気持ちになるのではないのでしょうか。どうして子は自分に頼ってくれないのか。この願いに応える力がないと思われているのか。願ってもどうせ聞いてくれないとあきらめているのか。

それでは、私たちは父なる神様に対してどのような思いを持っているのでしょうか。

私たちが父なる神様はどういうお方であるかをよく知っていれば、この願いは必ず聞かれると知ることが出来ます。嵐や困難があろうとも、神様との父子の関係の中、今週も共に進んでまいりましょう。

皆様、おはようございます。

8月もお盆のころとなりました。心なしか最近夜がしのぎやすくなってまいりました。

今日は庄原教会では召天者記念礼拝が行われております。皆様のご来会を歓迎いたします。

日本ではこのお盆の時期、ご先祖の方々をお迎えして交流を図るということになっております。つまり死者の世界(彼岸)から魂が現世(此岸)にやって来られるという考え方です。キリスト教では、現世(この世界)にいる私たちが、永遠のいのちに生きる天上(天国)に生きる方々に心を向けるということですから、仏教の考え方とは根本的に方向軸が異なるということが分かります。

方向軸が異なると言いましたら、先週私は二つの大きな出来事を体験いたしました。

庄原教会の礼拝を終え、東城に戻る車中、かつての東城高校の校長を務められた先生の奥様からお電話があり、元校長先生がわずか2-3日の入院の後に69歳で急にお亡くなりになられたとの知らせでした。この先生にはアメリカの高校との姉妹校提携を提案して受け入れていただいた経緯があり、退職後も十年にわたって途切れることなくご交流を頂いておりました。月曜日、お通夜に伺いました。

私は普段、すべての宗教に敬意をもって接することを旨としておりますが、今日だけは失礼をお許しいただきたいと思っております。その葬儀にて唱えられるお経の意味は全く分からず、奥

様は終始1秒間に4-5回くらいだったでしょうか、30分以上にわたって、ずっと目の瞬きを続けておられました。そしてお通夜の終わりの遺族のご挨拶の中で、突然のことで、今私はどうしてここに立ってご挨拶をしているのか訳が分からない状況ですと語られました。

私の頭の中には、お優しかった、教育熱心だった、アイディアマンで、地域を盛り立てることを日夜考えてくださり、常に変わらず退職後もご交流を続けてくださった先生のことを思い出しながら、ひたすら心の中に「われはおさなご われ主にすがらん」の賛美歌が巡っていました。どうしてでしょうか。ここには確かな救いがあるからです。私たちは死を前にして、無力です。行く人にとっても残された人にとっても無力です。どうしようもなく人は無力です。死に抗う手段などだれ一人持ち合わせてはいません。しかしキリスト教にはあるのです。主がわたしの手を取ってくださるのです。どうかご一緒にご斉唱ください。

聖歌 490 「われはおさなご」

- 1 我は幼子 我主にすがらん
小さくあれど 信仰いだきて
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

- 2 などか怖(お)ずべき 我主にすがらん
神の御霊の 導きあれば
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

- 3 晴れたる朝も 我主にすがらん
嵐の夜は すがり祈りせん
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

- 4 息を引く時 我主にすがらん
よし天地あめつちは 崩れ去るとも
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

聖歌 651 「主がわたしの手を」

- 1 主がわたしの手を 取ってくださいます
どうして怖がったり 逃げたりするでしょう
優しい主の手に 全てを任せて
旅ができるとは 何たる恵みでしょう

- 2 ある時は雨で ある時は風で
困難はするけれど 何とも思いません
優しい主の手に 全てを任せて
旅ができるとは 何たる恵みでしょう

- 3 いつまで歩くか どこまで行くのか
主がその御旨を 成し給うままです
優しい主の手に 全てを任せて
旅ができるとは 何たる恵みでしょう

- 4 誰もたどり着く 大川（おおかわ）も平気です
主がついておれば わけなく越えましょう
優しい主の手に 全てを任せて
旅ができるとは 何たる恵みでしょう

ああ、キリスト教にはこの確証があるんだなあ、しみじみと感じるのです。主が、イエス様が私の手を取っていてくださり、とこしえにその手を離すことはないのだと。私たちが理解でき、安心し、穏やかに、平安に、感謝の心で死を受け入れることが出来る世界なのだ。私は本当に、心からそのことを信じています。そして私はキリスト教を信じるものになって本当に良かったと、つくづく思います。クリスチャンって、最高だと、何度も心に思います。どうしてでしょうか。力強い父なる神様が、幼子である私たちを抱えて救い出してくださるからです。静かな昼も、風吹く夜も。人生の順風満帆の時も、向かい風のひどい暴風雨の逆境の時も。

私は恩師の奥様に、ご家族の方々にこの平安と保証を語りたくて居ても立っても居られない思いでした。長々とお経が流れる中、奥様が現実を受け入れられずにひたすらに満身創痍の心の傷を抱えて、ご自分の意識を奮い立たせておられるときに、ああ神様の賛美歌がここにあれば、「われは幼子 われ主にすがらん」の賛美歌があれば、主イエス様のご愛溢れる導きのメッセージがあればと、ただただ奥様の横顔を見つめていたのです。

次に私が体験したのは、その二日後の先週の水曜日の出来事でした。

姪御さんはクリスチャンで、大変な叔父様思いの方で、いつもいつもお見舞いに行き、熱心にお世話をする方でした。亡くなったお父様に似た、そのお父様の弟さん。そのクリスチャンの姉妹はお父様のお姿を叔父様に重ね合わせ、優しくった叔父様に祈り、仕えるのでした。叔父様は自転車に乗って買い物に行くくらい元気だったのに、ある日その自転車で転倒されてから身動きが出来なくなり、簡単な整形外科の治療後に退院のはずが、どんどんと状態が悪化していくのを見守るしかない状況でした。そのクリスチャンの姉妹はもっとこんな治療出来るはず、回復してまた元気になれるはずと、知力を尽くして叔父様のために考えますが、状況はそれとは裏腹で、叔父様のご家族は治療の機会をあきらめざるを得ず、あとは残りの生涯を負えるだけだとあきらめムードが漂う中、ひとりクリスチャンの姉妹はあきらめずに治る道を探し続けていました。そのような中、ついに転院することになり、リハビリにもあまり力を割いてはくれない、死を待つばかりの病院に転院することとなり、その姉妹は涙ながらに叔父様の不憫を悲しみ、祈られました。そのような中、良いこともありました。かつての病院では家族以外の面会は許されなかったのですが、新しい病院では家族以外の面会も許されたのです。私はその叔父様にお会いすることを願い、姉妹と共に病室に伺いました。治療の手立てに薄い、職員配置の少ない病院で、叔父様には刺し貫かれるように孤独と疎外感を感じておられました。意識がはっきりしている叔父様が、ご自分が見捨てられているかのような苛みを感じておられるのを見るに忍びないと姉妹は激しく悲しんで涙を流されました。私の心は定まっていました。私は神様を信じていました。そんな閉塞した状況で、神様は救いを成し遂げてくださると、私の心には言いしれない確信がありました。

5:13 これらのことをあなたがたに書きおくれたのは、神の子の御名を信じるあなたがたに、永遠のいのちを持っていることを、悟らせるためである。

5:14 わたしたちが神に対していただいている確信は、こうである。すなわち、わたしたちが何事でも神の御旨に従って願い求めるなら、神はそれを聞きいれて下さるということである。

5:15 そして、わたしたちが願い求めることは、なんでも聞きいれて下さるとわかれば、神に願い求めたことはすでになえられたことを、知るのである。

「われは幼子 われ主にすがらん」 私たちは幼子。これが私たちの有様です。現実です。風に吹かれる小さな一枚の葉っぱにすぎません。しかしその私たちを守る手があるのです。それは力強い手です。それは私たちの主イエス様の手、父なる神様の手、聖霊様の手です。

叔父様はそのような困難の中におられながらも、柔和な佇まいで、突然に何の赦しも事前に

得ずに唐突に伺った初対面の私に訝ることもなさらず、感情を害されることもなさらず、ご丁重に迎えてくださいました。面会時間は15分。ご挨拶の後で、一当たりお話をしてから、「いつくしみ深き共なるイエスは」を歌いました。驚くことに叔父様と一緒に口ずさんでくださいました。どうしてご存じなのですかと伺うと、父子が唱歌と同じだからとおっしゃいました。私が歌詞を一言一言に分けてお伝えしながら歌いますと、叔父上様もはっきりとその讚美歌の歌詞で歌ってくださいました。

次に歌いましたのが、「われは幼子」でした。

1 我は幼子 我主にすがらん

小さくあれど 信仰いだきて
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

2 などか怖(お)ずべき 我主にすがらん

神の御霊の 導きあれば
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

3 晴れたる朝も 我主にすがらん

嵐の夜は すがり祈りせん
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

4 息を引く時 我主にすがらん

よし天地あめつちは 崩れ去るとも
絶えず主イエスの 手に依りすがらん
静けき昼も 風吹く夜も

ここでも叔父様は共に歌ってくださいました。私は神様が確かにここに共にいて働いていて慰めていてくださるとの確信を持っていました。

共に祈りました。いつくしみ深い神様が共にいてくださるとのこと、その十字架の死と復活とによって私たちに赦しと命の道とを開いてくださったこと。この主を有難く心に信じ受け入れる者の心の中に主は住んで、いつもいつも励まし慰め助けてくださること。力強い手で困難を乗り越えさせてくださること。祈るうち、叔父上様の目に涙がたまり、一筋の流れとなりました。私は神様に感謝いたします。神様は生きていらっしゃいます。生きて私た

ちを愛して、困難の中にあるわが子を、決して放っておかず、見捨てず見放さず、助けを求めるわが子のために、親は命がけで助けてくださることを、私は心深く、心の核心から信じています。そしてその願い求めを聞いて、それが与えられるにふさわしいものであれば、すぐにそれを叶えてくださることを私たちは知っています。私が叔父上様に神様がきつとお慰めを注いでくださると信じたように、私たちは父なる神様をよりどころとすることが出来るのです。神様にしかできないことは、神様がしてくださる。絶体絶命の時こそ神様の出番の時だと、私たちは経験的に知っているのです。神様はそれはもう厚い愛のお方です。そして私たちにも愛に生きることを願っておられます。そして神様を心から信頼し、神様は私たちの願いに応じてくださる愛に満ちた方だと信じて寄りすがることを求めています。

小さい時にあんなに可愛く「パパ、パパ」と言っていた子供も、大きくなって頼らなくなって、寂しいなあという思いはどなたにもおありと思います。しかし私たちにとっての神様は、そして神様の前の私たちは、決してそんなたとえ話のような関係ではあり得ないはずです。私たちは無力です。弱々しい幼子です。しかし力に満ちた神様に愛された幼子です。命がけで愛して下さる神様の幼子です。どうして怖がったり、逃げたりするのでしょうか。優しい主の手にすべてを任せて、旅ができるとは、何たる恵みでしょう！！

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。よりすがるべきお方、願い事をお聞きくださり、どんな困難な時も見放さずに助け尽くしてください。お方が私たちと共にいてくださるとは、何という幸いでしょうか。かわいい子よ、何でも願うことを言いなさい、私はあなたの父だからと、神様はいつも私たちに向き合っていてくださいます。私たちはその神様にすがり求めます。どうか平安と平和、良き将来をお与えください。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン